

論語を生かした 社会へ意見交換

湯梨浜でシンポジウム

めだか論語シンポジウム「第1回 論語の風・山陰大会」(実行委員会主催、新日本海新聞社など後援)が20日、湯梨浜町引地の燕趙園内集粹館で開かれた。パネルディスカッションや講演会などを通して、論語を生かした社会生活について考えた。



活発に意見を交わすパネリストら。20日、湯梨浜町引地の燕趙園内集粹館

パネルディスカッションは「地域経営、教育、人材育成に活かす論語の教え」がテーマ。新日本海新聞社中部本社の佐伯健二代表をコーディネーターに、人間自然科学研究所の小松昭夫理事長、谷口病院の谷口宗弘理事長、大昌の古賀隆昭社長のパネリスト3人が論語の現状や必要性、今後の生かし方を軸に意見交換した。

古賀社長は「論語を取り入れることで、今後の日本の活力につながる」と指摘。谷口理事長は「戦後の教育は、特に『しつけ』を、おろそかにしてきた。今後、自分自身も精進していきたい」と語った。

このほか、論語の素読体験者による一言メッセージや論語を学んでいる賀茂保育園(三朝町)と湯梨浜学園(湯梨浜町)の実践発表も

あった。

講演会では、小松理事長が「経営と論語：今なぜ、めだか論語か？...」をテーマに話した。